

氏名(国籍)	金 孝 卿 (韓国)
学位の種類	博士(デザイン学)
学位記番号	博甲第2463号
学位授与年月日	平成12年7月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	日本と韓国の幾何学的紋様の造形的考察
主査	筑波大学教授 博士(デザイン学) 原田 昭
副査	筑波大学教授 三ツ井 秀樹
副査	筑波大学助教授 博士(芸術学) 守屋 正彦
副査	東京藝術大学教授 小町谷 朝生

論文の内容の要旨

本論文は、日本と韓国の宗教観、自然観、美意識の相違点を基にし、両国の幾何学的紋様とその発生からさまざまに変容していく形成過程を構成学的観点から解析し、その規則性を抽出してデザインへの応用を展望した紋様形体論である。

日韓にかかわらず、世界のあらゆる地域で幾何学的紋様が多重多様に存在している。これらの幾何学的紋様の造形はいろいろな要因により変容し新たな紋様に再生されて行く。源泉は同じ要素形体であってもその紋様の形成過程での文化的刺激の相違によって、たとえば日本では巴紋、韓国では太極紋というように造形的差異性が生じてくる。本論文は日韓の幾何学的紋様の造形の形成過程について詳述し、紋様の体系化の方法としてシンメトリー原理による検証を行い、また紋様の集合としてのパターン創出法としてシンメトリー原理を適用することを試みている。

本論文は、これまでの先行研究が触れてこなかった紋様の形成過程という困難な領域に意欲的に取り組み、デザインの形態創造におけるシンメトリー原理の有効性について構成学という観点から明らかにした点は、デザイン学の方法論に関わる独創的な業績であり、重要な貢献であるといえる。

論文構成は、序論において本研究の目的、動機、方法について述べ、本論の第1章から第3章までは紋様の定義と発生ならびに変遷。第4章は日本と韓国における紋様の形成過程。第5章は紋様の幾何学的原理。第6章では日韓における紋様の特徴分析。第7章では紋様のパターン展開。そして第8章の「結論」によって構成されている。

「本論」

著者は、第1章で紋様の類義語、日本、中国、韓国での紋様の意味の相違について述べている。第2章では幾何学的紋様の発生からその変遷について述べている。第3章で紋様の形式とその発展の推進力について述べている。第4章では、宗教の中で用いられている紋様の特徴、日本と韓国の美意識の相異による紋様の特徴について述べている。特に、日本での紋様は家紋に代表される単一紋様に特徴が見られ、韓国では障子や窓枠に用いられる連続パターンにその特徴が見られると結んでいるのは著者独特の見方であろう。第5章では、紋様に内包された幾何学的特徴とその形式の構成原理について述べている。第6章では、3種(円形、三角形、四角形)の基本幾何学形体を基本とした日韓両国での紋様の造形的特徴について述べている。それぞれの紋様の構成について作図

解析を行い紋様の構成原理を明らかにしている。特に韓国における太極紋と日本における巴紋の造形の共通性と相違点ならびに紋様の造形的遷移過程について詳述しているところに特徴がある。第7章では、幾何学的紋様をシンメトリーの原理によって説明づけられることを検証し、更にシンメトリー原理により、複数の紋様により表現される幾何学的パターンの構成法を体系化している。特にこの章は構成学的観点から見た紋様の解析結果を連続的紋様としてデザイン展開するための創造的方法について論述しており、構成学のデザインへの応用を示唆することに成功している。第8章では結論として、日本と韓国における幾何学的紋様の形成過程についてその自然に対する美意識の相異が異なった紋様形成の過程を生み出していること。そして両国の紋様の造形的特徴として、韓国の紋様の特徴は日本と比較すると、よりシンメトリー性が重視され、直線が多く用いられ、複数の連続パターンが多く、定型化しているとまとめている。さらに、多様なパターンを創造的に生み出す構成法としてシンメトリーの原理の適用に大いなる可能性があると結論づけている。

以上のように本論文は構成学の観点から紋様の形成と造形的特徴の抽出、ならびにデザインへの応用という研究目的をほぼ達成しており、デザイン学に新たな研究方法を開示し、その有効性を考察した点で学術的意義が極めて大きいと認められる。

審査の結果の要旨

紋様は伝統的装飾芸術のもっとも基本となる造形要素であり、これまで多くの研究者によって研究の対象とされてきた。ところがその多くは紋様の意味する歴史的・文化的背景に基づいた研究内容を主としており、本論文のように日本と韓国の幾何学的紋様を対象を絞り、その形成過程ならびに造形的特徴を比較する構成学的研究は、先行研究において例を見ない。多角的な視座から膨大な収集資料を分析し、これまで曖昧にされてきた日本と韓国の紋様の共通性や相違点、形成過程での造形的変容について明らかにし、デザインへの展開をも試みた著者のひたむきな研究姿勢は大いに評価できる。シンメトリー原理の基本的枠組み、研究方法、論旨、研究成果の全てにわたって、学位請求論文としての十分な水順に達している。特に本論文では、幾何学的紋様の形成過程と造形的特徴の抽出のみにとどまらず、幾何学的紋様をシンメトリー原理によるパターン展開の創造的可能性に踏み込んでいる点は著者の努力と資質をよくあらわしており極めて新鮮である。

一方、本論文の主題は、日本と韓国における幾何学的紋様の造形的特性の解明に置かれているが、デザイン支援を目的とした実践的レベルでの応用検証がこれからの課題となろう。今後は著者の研究のより創造的、実践的展開を期待したい。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。